下にて鳴〻おとゝ鳴ゞ又底の方とよりて鳴〻おと〻金〻金の音ゆゑ〻玉響さて當てゝ先祇園に近き音なり

或人云磨去りて煙〻の磬石の事とさゝり瀧別の青石磬其長一丈餘き事鶴毛の如しゆゑ云事有と見えたゞ音も煙〻きべし瀧別の石筍ハ動て響たる音ハ其音金玉よ近し波楊貴妃の要せし藍田の緑玉磬ゆゑの類なるべしと〻

蛇見よ観世音菩薩現し居の事

武蔵の国淺原郡大野村末正寺 西門殺弘の先の和海道より西たり入村なり よ蛇見よ観世音菩薩の像現し居のゆゑ〻吉乃い事ハ良深き〻〻天保十又年 甲辰四月廿日思ひ立〻〻の地よ

初〻右の像と共写ゆ〻来り〻と左よ寄し〻亟ぬ事来世ハ安房の国士如琴嶺の麓り記せし文をけゆ故見とも爰よ記し亟侯今さゝ云よ及ぶべ

海中出現観世音菩薩像〻の記

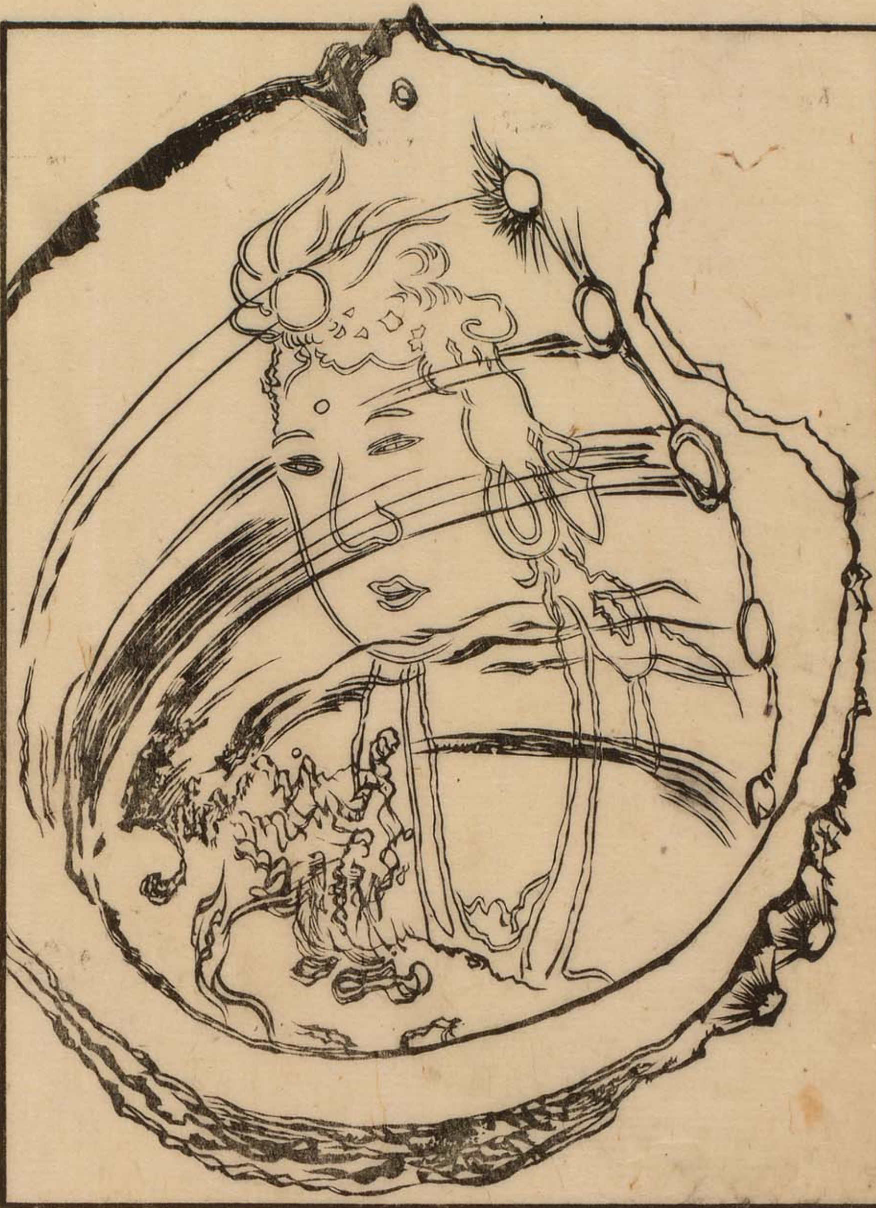
抑此菩薩ハ安房国朝夷郡白浜村大字苔の海士市五郎と云者同邑福長浦林の観世音と信し胡久寺と選び宿ぐ〻る御ゆゑにまの龍とたゞ〻なるゝ事ハ日蓮よ見と元おのゝも又深世渡りのようぐとそうぬ時よ文政十年秋八月十日夜不思議の霊夢と蒙りそべ〻ゞ元信ゆゑバのやゝ〻も思ほへも〻野潟ゞ海よ立ゝそ行るよ海面踏り初りゆゑ〻ゞ波ゆゑとゞ〻りゆゑして岩根と尋ぬるに忘れのさゝゆゑ〻龍初〻の初り

漁りにくるをとりけれ家路りかへり真珠をふすのやある
らむしかねまうちまするれバ示くも観世音の尊
像なりやうなりけれバまさに母子おどろき作りし
罪とかこちつゝびけり其後より外ならぬ持の肉を
さしの海底へかへしたり尊像をとゞめて尊信し
其母も鮑をたのしまざりし母子発心し産業をやめて
道心者となり子孫八百姓となりしといふ事を侍
つまね

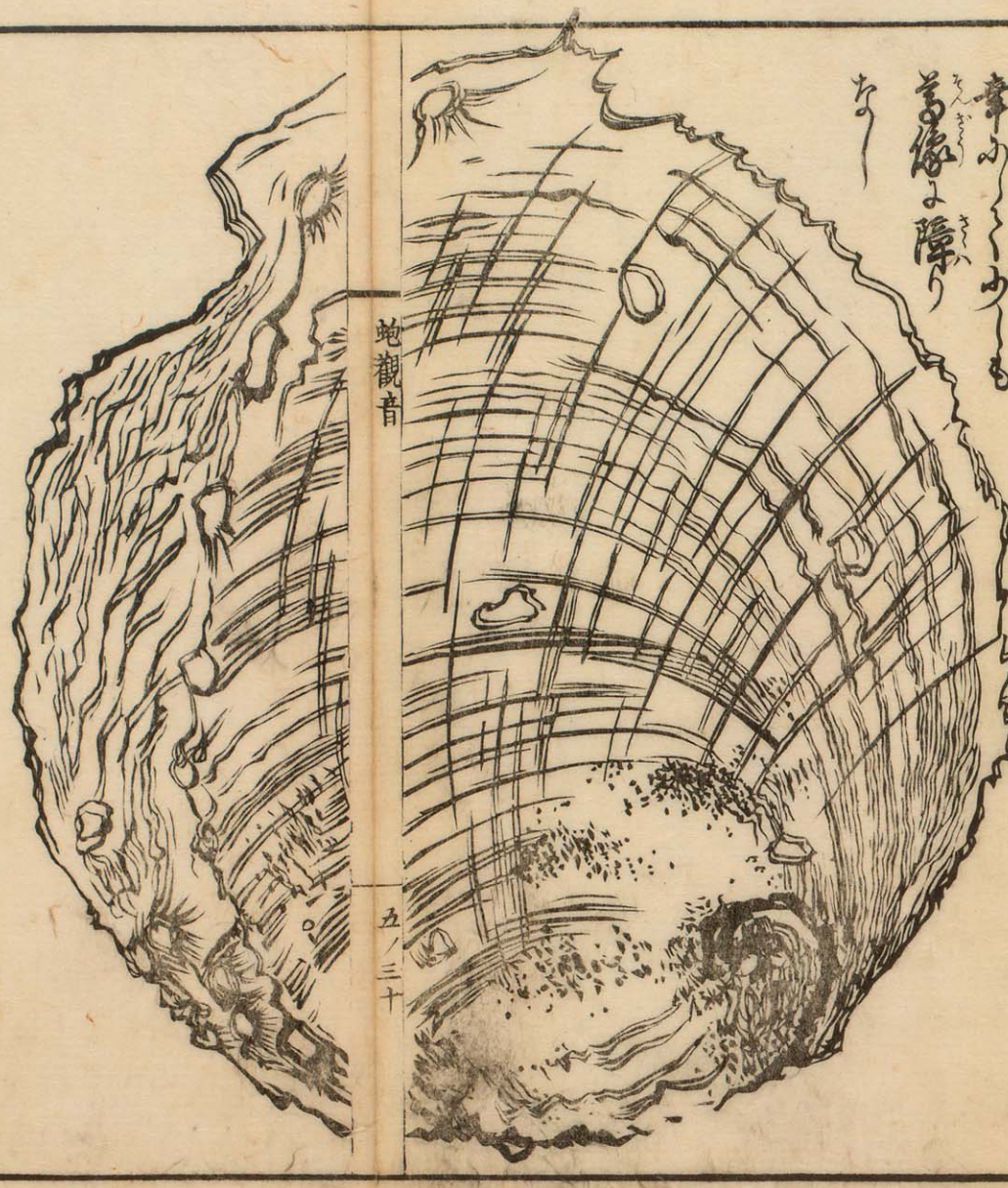
文政十一年二月十五日

安房の隠士
妙観か霧志るに

右記録り霊夢を有るも何ぞ霊夢ぞと寺僧に尋ぬるに
稀と尋逢ざりし故遊りて萱へ兼まども海をあ
ゆき行る夢そのごとく八形りくりとの事なり夫井



貝の大き
さ五寸ばかり
もの〳〵大ひなる蛇ありて緑の瓦屋のごと
く欠損〳〵なる瓦を
葺みし〳〵みしも
蒙像より障り
なし



蛇観音

五/三十

みく〳〵ハ雲母仏うまぐ霊告をなす事を〳〵思ふる奴
主蛇の貝の肉よ骨の内ぬき寶冠の事ハの観世音現ず
居ゝまへど名波貝〳〵ハ祈も見えぬ常の貝ふして
紙〳〵貝よ照〳〵〳〵魏洋とる花法面鏡ぬ何ふも鮮ハよ
〳〵生ハの内〳〵美蝶の孤ぬまゝに花の名雲之
雲の瓜僅義濃紙二枚紙もこる〳〵紙居〳〵もじも瞬もせず
篤〳〵拝〳〵貝をバ美〳〵よ赫耀と〳〵鮮〳〵ハ貝彼氏

家より手傳ひとの事江戸牛込薬王院ハ播磨国乃川西郡
吹田村と云ふ所の住なり右
之量寺ハ源信僧都念佛院と云ふ山寺に家居成
居るを世人文政中明林寺乃常住房より請くるく
右乃男女面色よ霊験あらたなる吹聚び居りひしり面色
正月十七日夜より面色絶次面色変りたり同十八日より大師
河原乃大師へ参詣す東逸寺へも参詣す東逸寺
乃面色乃活よ回冬以来ふたゝび面色敬仏祖
彼男女面色うせしよりこゝろ面色て
ふたゝびとうせしなり此事よりいつゝ右面色の
事ともを死生常房と云よ尋るよ日く祈念して記言
絶三十三度ゆゑ一七日乃間漬海敬しりたば色地面色

海中に生じ乃故面色よりて霊験顕はる事と存ひ
この言敬存ひ乃ち水夫乃法ゆゑ八海せらるゝよ面
色乃ふたゝび尋るに行も外の法八海中さるゝ
必七日乃間よ面色海ゆゑこの言葉乃事共とも
祈念をしるやゝ同り一度も祈念せし事なりとの
事敬存ひ大病人等平癒乃事と祈念をしたまひ
色改霊験あらたゝと勧めまゐりうり安齋随筆よ云
池上本門寺ノ僧来テ談話ノ序ニ本門寺ニ蛇貝ニ南無妙
法蓮華経ノ文字現タルアリ貴キ事也ト云予聞テソレハ
細工物也予作テ見スベシトテ作リ置テ他日僧来リシニ
見セタリキ其製法ハ蛇貝ニ佛像ニテモ佛名ニテモ生
漆セシメウヲ以テ書テ蛇ノ穴ヲ蠟ニテ塞ギ漆ヲヨクカラシ

テ酢ヲ十分ニ入テ二十日程置テ扨酢ヲ砂ヲ以テ能磨ケバ漆ノ付タル所高クアラハル、也是無益ノ戯ナレドモ如此事モシリ置ハ僧ナドニ訛サル、事ナシ奇妙不思議ハ皆造事ナリ〻〻〻〻も漆の〻〻書嵐屋〻〻〻〻

とゝ吐ゝ吐ゝ吐ゝ平と名古屋のゝゝ人とゝのりたまゞゝ一枚も
変ぜる所と見ざる故の祝り祝成吐と吐てゝも不審の
事よ思ハ平のゝゝとゝのゝゝ吐ゝ吐ゝ吐ゝ吐ゝ吐ゝ吐ゝ吐ゝ化の
為とゝゝゝ載せ亜人間のりゝ所よりてゝのりてゝもゝ
事よ祝さるまほ

名居古屋のゝ人ゝるハ
形のゝゝ
みぞ

蚯蚓の長ハ生居るゝと

蚯蚓の長の見ゝるハ形の
ゆゝ頭の方ハむゝゝゝ
なりて尾のゝゝハ
まゞゝゝゝ
ゝゝ生ゝ

頭の方ハ
ゝゝ生ゝ
尾の方ハ細ゝ
少し生ゝ居
ゝゝのり

又或人の蚓の蟹の変ゝ怒りと取持るゝの事と吐
居ゝに平が下野の事義ハ武州江戸田村のゝのゝるゞ
右村ゝゝハ蚓を毎ゝ蟹と成事ゝゝ成怒りも折く
見命りて成変ゝゝゝと云放篤と吐よ蚓の蛞と佩る
なりて図細長ゝゝ出ゝゝ生ゝる図よ毛生ゝゝ生ゝ成やゞそ
蛞と脱ゝゝゝ常多とゆびゝる蟹ゝ成ゝ又右事義の
親ゝるゝのゝゝ云よハ蟹捲鮮近ゝゝゝ四長湯老ゝ成ゝのゞ
仏と付ゝゝ見亜べゝゝと示さまゝゝる事義ハ一枚も見
ざりゝゝと吐ゝ荘子の道逍遥ゝ蛾化ゝて鵬ゝ成ゝの
事も偶云ゝも云がゝゝゝ造化の
仏ハ人智の及ぶ事よゝのゝゝ
事義の見ゝる変化怒りの姿と
同人よ吐行ゝゝ為ゝ亜ね怒ゝゝ

出島の新の変化の事は草綱目に記載ありしと
雖ども此の変化の事見えざりしを同或人の筆記より
国番取の浦に潟にて鰤澤山より居る鯔と云魚の化
あるかの潟人の云鯔の膜ようすと云ものを鰤
と云又蟹も世取りなる鳥と云名なる鳥は蟹
なるもなるべし山鰤と云ふ海鰤の事
海鰤は鯔と云鯔は鰤と云ふ海鰤は海獺
ふる事なり海獺は海獺なる事なり
このなり物を地より志ばし住せし人より聞の胡猴
変じ鰤は折漢人の細なる事なるべし
故に老いて捕られざる事なり
物成るものなり尋常の鯔の鱗の下より毛

生出し鱗の間より毛那生居るなり
たるや頭うどの胡猴より変り居し
右の事孔浦の名より居し鱗の下より毛生
しなり後は住馬面と改る事と見えたり
且蟹の名なるよ成るも一変も見えざるなり
毛なの花漢より出ると侍る委敷記
うもと云は脇の事ゆ思ふ長も遠化の物も
人智の及ぶ事より此ぞ

徐道玄猪と載せる事

徐道玄と信別小徐歌小泉村に土小泉の右衛門の男なり
中年より江戸へ出て商業と為め人より知る事の
頃より予知己なれり此人も長崎へ

なりんぢ〳〵武藝と好〳〵親類家来等接羣する〳〵壮年の
頃を国中所〳〵と周遊〳〵を出んとする〳〵武藝の師〳〵師
匠を尋ねて教せしを〳〵を頃国国伊豆駿河を頃の間
詢ぐ嶽の麓なる山るへを遍く行〳〵師範せしよ所を
僅の平地なる〳〵人家も漸二十軒半なる〳〵田畑更なる〳〵
皆山嶺と業〳〵を外山稼のみとん渡世〳〵さるか不
なりしぐ或時道云ふを各達の猪と獵さるよ深
森あを一段見物仕度ものと〳〵思へるよ為さるの
ぐ〳〵出生とはを切の〳〵遍特とねせ食ぐ〳〵中せども
を長たる者の〳〵ふを時若悪敵ま〳〵遍〳〵よ成さる
爲〳〵遍〳〵先〳〵居〳〵よ或時彼者云ふ猪八付者と
なり猪もさるり出〳〵澤山り羣を居るま〳〵明日を

猪截　五ノ三十五

を勝よ〳〵山へ入遍猪を遍集ち焼よ入中〳〵ひる日松兵の
手際ふり八ち感り四仕留ひを〳〵〳〵を用意とる
未明よ食事とを〳〵めてを後六七人よ大二疋と兵よ赤を
ぐ〳〵山路よ入るよまぐ山を雪深〳〵ハ歩り居ふを
とけ居るま〳〵を為りてまれ行も自出るぐ〳〵
猿の裏よ打の出〳〵ものとを〳〵山へ入遍を山の懐の
ぬ〳〵離るなる所へ行〳〵先生八武所り待居るへ〳〵
秋〳〵ハ四方へ分け入〳〵武所へ猪と遍出〳〵中を〳〵ま〳〵
澤山り四仕留を〳〵後ふを又武所へ集〳〵集り中〳〵
大猪と遍出〳〵猪よ吃驚〳〵る時八声と合〳〵巻し
下さるべ〳〵たなのき時を猪よ無〳〵を〳〵驚中ひ大八驚く
の先達よ〳〵中〳〵大切よ仕度〳〵怒り教へさ〳〵て

唯壹人跡〳〵垂〳〵皆ちり〳〵よ深山へ分入り叔猪乃
さゝり出〳〵るか時ハ牝猪壹疋よ牡猪三十疋も四十疋も付
纏ひ居〳〵遠合手まよ血と流〳〵の事に成〳〵居〳〵も
一向平氣乃振まよ〳〵羣居るものよ〳〵山時ハ彼も
多情り目〳〵まで〳〵人〳〵とも一向恐まで事ごと不歌よなり
居るもの〳〵種〳〵遠方乃者〳〵にぱん〳〵と鉄炮
乃音響さ出すと同よ谷一川向の方よ〳〵遍り大乃
吼る者吹ゐるまゝ色と見るよ猪ナハ必ず驚き山よ
唯大一疋よ〳〵者さりに吼怒り居るさ事と思ふ
間も〳〵遠〳〵居る内よ豆腐りけんと無くる
〳〵雷中怒よけと〳〵丈切よ大乃声の止まるハ
猪り怒〳〵まで〳〵よ相遠なり僅谷一川向乃事なれバ

猪截

五ノ三十六

〳〵見ゆまでも手間を遍〳〵猪を大種よ見え大を
猪種よ見ゆる不故如何とも仕方〳〵無事成間よ合〳〵か
事不成〳〵と思ふうちよ頻りに鉄炮乃音谷〳〵よ響き
〳〵りて亜傍乃谷ゐるより〳〵この方へ大猪三疋たきり
〳〵来り〳〵り見ハ〳〵〳〵深よ〳〵山へ三疋来まで〳〵ハ
遠ぎ雖ゐるべ〳〵と小ゐるさ而へ光り〳〵叢と小猪よ
〳〵〳〵侍然〳〵までも見場悪鋪手と本下乃雖而ゆ名
刀山ゐハ向〳〵るべ〳〵付〳〵脇先〳〵討留べ〳〵と刀ハ
手鋪〳〵〳〵木の枝よ結付亜所よハ本よ〳〵付居所よ〳〵
接刀と持〳〵侍然〳〵るもの〳〵三疋乃猪今迄〳〵居〳〵
廣場へ来りてくるひ四り居る故ヲ〳〵イと声と無ると亜よ
壹疋死揚り来り〳〵る故例へ〳〵付真向と貫も徹塵よ

解けよ〳〵切剝よ頭石よおけるこ〳〵双亀〳〵皮のこぶ〳〵
そげ薄き故猪を泳たけり〳〵再び亀甲を来るまゝ又
同じ石をつけおよ二刀まゞ〳〵切剝よ先乃ゞ〳〵双亀ゞ
皮のこそぎ落〳〵こゞも始より三太刀の底り亀石の
痛き故よや猪ハ歯下乃谷へ落〳〵ゐひ居うこの
二度目乃牙の肖けゝ悪浦腹より胸へうけ〳〵牙よけ
彼ら毛衣類も無剝〳〵ゐゞ〳〵顔へ血駁爰流毛出ん
中〳〵も底とも面まる有除う〳〵毛ハき〳〵ゐ事よ逆
ゝり頼〳〵切ゐる見乃眼先ゝ〳〵骨里〳〵〳〵双亀ゞ
切剝事もなゝゞ今ひ石ゐ〳〵命と落とゞ〳〵猪会の穂
なり〳〵思ゐ落もう〳〵歯よ続ひ〳〵二疋目乃猪うけゝり
来りゐるまゝ今よりて今度ゝんせゝこゝゝ少〳〵早く
風〳〵切ゐるまゝ猪乃鼻の先と切落〳〵ゐり事ひゐり
鼻ゝ〳〵乃毛石ゐるゝバ少〳〵の底ゐゝも屋風を伝と
妙〳〵剝ゐり逆り〳〵毛も谷へ落〳〵先乃も前と二疋
うめゝ出る又引張ゝ〳〵今一疋の猪種り来り〳〵ゐり
石絵まゐと切〳〵ハ又先のゞ〳〵双亀ゞ切剝巣ゞ〳〵今
度ゝ毛と離ゞ〳〵〳〵牙と肖け〳〵前毛と二本ともに
切落せ〳〵故毛も歯下乃谷間へ落行〳〵三疋うめゝ居
たるゝゝまハまゞゝゝまゝ事ゐまゞゝゝ事ゐまゞも中〳〵叢石へ
光揚り来る物もの家故漸〳〵先ハ門〳〵毛ともつゞ
たゝゞも何ゐ小ゐるゝ山乃後ゐ〳〵行よハ本よ永肖居
行よゐ〳〵ハ接牙を持居進退も自由ゐ〳〵孫バ先ゝ
平場へ下り〳〵底ゝゝ見ゞゞや〳〵先の石へ下り三ゝ猪

三疋〳〵も亜傷乃谷間よのうち居〳〵まども丈と見向もせぬ
先第と解〳〵けらまする所と見るよ本綿の海入二
枝よ絡乃細長きりうり利剣〳〵切裂する中くう脇
補体もされ〳〵脇乃真中ようのぎ〳〵うけ〳〵右の肩
乃うさへ八九すの皮底うり浅きづうぐ〳〵丈〳〵けり破り
〳〵敵血殺変懐中よ満〳〵よ面敵雑〳〵の〳〵下第
よ〳〵能者〳〵志乃うりと強び平氏底の痕と見へうり陰花の左底
漸〳〵少〳〵望も落付〳〵ぎ〳〵思よ皆の者共我ホの
地色よ居〳〵猪と氏所へ追集るとき〳〵ひのぎ〳〵谷〳〵そ
強施とおバ今よ又氏所へ猪多〳〵集り来るべ〳〵血気よ
さやりうるき事と好〳〵逆よ勝〳〵勇と事ハすバ
う〳〵志形〳〵ぬ命と〳〵氏所よ〳〵ぬ業よ死業る事と
見へうり胸〳〵強会色極うり〳〵不乃間なら事
新〳〵頼りよ後悔とな〳〵勇者もたの〳〵果へ〳〵ども
氏姿よ〳〵憂へ居〳〵も仕方もう〳〵事乃と〳〵三亜
先三疋と仕留へうり事故ト沢さるけとども頭骨を
剣〳〵るハ切兼て三刀と所〳〵ぬ〳〵外皮と切と
切なぎ〳〵〳〵皆〳〵見せ苦変切抜へ重〳〵本〳〵バせあて
一疋と胴切う又ハ〳〵行とりよ殺度すの之今度ハ三場
よ身氏所よ〳〵刀よ〳〵切剣度〳〵思ひ〳〵強気と本の
枝よけ亜〳〵侍間よ亜傷乃山と又大猪十一疋と連立て
強行故此行ハせまぎと思へども亜陰〳〵ハ氏所よて歌乃
為り落て命行うせん一疋も澤山り切〳〵死後ぬ
矢ひと防ぎやと〳〵所存と極あ不歌よと又右の猪へ

ヲハイと敷メを敷るゝ忽ち形くゝ巡ゝゝ来りて
敷るゝ必巡ゝ来る故ゝ也 三十一疋ゝゝ出ぞ法を立て義毛と逆よりゝ
かりゝゝと歯をうゝゝ 相ひ来る撃ひ義らるよ尖さ
も何とも弦云へ申さもうゝ先最初敵勢より来ると云ハ
能筭ゝゝ 胴中と云ハ二刀よ切新り何のざうさも形く
二刀よ切敵ゝうり強ひゝ来ると也又たゞして拵の
面りよ切敵ゝよ性ゝ也もうゝ切うり色ハ的義事と
色ゝくハ何十疋来ると也一対づゝゝ切敵ゝ屋ゝと
忽ち心も勇ゝ立ち大ひよ撃ひと培ゝゝ敷う来る為よ
胴切うゝゝ強ゝ八疋と切敵ゝうり三角よ三疋ハ
何ゝ色ゝ云ゝゝうり切方と云ゝざりゝと流よ十疋もも色
来りゝゝ八方より発付来ると左右へ弓と背けり

猪ハ考と

猪載

之巻猪

あらかじめ切刻みておくべし。猪肉は賞味して加減すべし。其他熊肉
のごとく切味を知り、後に猪と切ハ何の造作もなき事
なり。然るに、近頃教へ長ずる先猪の猟り来る時ハ
ぐりぐりと牙を噛のごとき事なれば、人よりの
義を逆よりとなく怒り来る時の事なり。尖き事ハ
矢の如くにして間六七寸の如くなるものを尾とヒヨイと
立つる尾と立つるとハ異なり。実付来るに同時にのく
彼尾とヒヨイと立つるを見るより直ちに傷へ投げて切と
なるも二切ハ一向に立つ事なきものなれば若猟りて
頭を付ざる双物なれば中切にするものなるハ熊
なれば立て事なき事なり。又切ざるに至ハ十間も共なる
一文字に形なるなり。支なり猪と異なり出て来るゆえ仮令

何度切捨てても二度目迄つゝ来るハ馬成すのよ此ものゝ
猪を叢石荊棘の中ハとゝゝゝゝ繼壁懸崖の間を延歩行
事平地と歩行〳〵如くなるハ心平地の猪頭ゞゝゝゝゝ
抜切味噌人ゝ見バ何程も出来るゝゝゝ思ひ間よ四方の
猪飼の者も止ゝゝ居ども思ひ者ハ数丈見事ゝゝ
切教せ〳〵事故死後〳〵ゝ働ず〳〵抜〳〵ゝゝゝゝゝ
呉〳〵も恐ろ後日よ遺ゝゝ〳〵ほ〳〵〳〵ゝとつゞ居る
所へ主人猪の皮と二枚〳〵大程の猪と一丈有て来り
此猪ハ好加減の故今疾く振舞中ゝゝ迄持来りゝゝと
い抜出而の事拍と見〳〵ゝゝゝゝゝ先生故見事成仕間
ゝゝ感心ゝ呉ゝゝ見ゝ〳〵ゝ事ゝゝ唯〳〵居る
間ゝ外の者も皆〳〵二三丈づ皮を持〳〵揚ゝ来ゝ

まゞ初に対〳〵二丈の猪ハ手傷死せゞ〳〵傷よ苦〳〵
のゝゝ居〳〵と浮ゝ来ゝゝゝ着先を案ゝて来ゝ死切
ざゝゝと喰ゝゝ義別皮と刷膳とゝゝ時ゝの猪も苦
恐ゝゝ〳〵恐ち皮も乳膳もとゝゝ出〳〵ゝゝ手間よ十六七
歳成童ゝゝの何ゝゝ云者生〳〵居ゝ来ゝ此猪と見〳〵
ゝ抜呉ハ先生〳〵〳〵思ひの外大馬鹿成事とゝきれで
折角教〳〵ても何の役よ立ぬ〳〵と高ゝゝ顔ゝゝハ
片腹痛〳〵事〳〵見ゝ下げ来ゝる先生成〳〵〳〵〳〵呉〳〵
胴切ゝ〳〵せ〳〵故皮の恵所ゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ抜〳〵ゝ〳〵ゝ抜
能〳〵間打ゝ〳〵皮ゝ〳〵疵付〳〵ハゝゝゝ恵よゝゝ骨折
ぞん成駄来ゝる猪ゝ門組〳〵喰ゝと寄〳〵ゝ〳〵故一突ゝて
踏ゝと死ゝ丈ゝゝに死ゝ〳〵ぬと恵よ先皮と刷乳丈ゝゝ

膽もとりて喜ぶ間〳〵背をたゝき捨て事おれば道ぶ
秘術と云〳〵三流り打留ると思ひの外量ふり
知りて〳〵初〳〵皮と底と付ぬ板よ元事と知ると
又ゆ乃間の山〳〵大ぶ猪よ吹無りて遠を方み
ぐ〳〵ナイ〳〵と声と奥をつまて〳〵恵大よ勢ひ付猪ハ
苦つて〳〵怪部のさまの〳〵世なるに除り走る方敬高無ると
も捨ると事と思ひ声をざり〳〵ゆ忍ち大き
うけ敷さまと〳〵ひつを人ひ大乃死うと殊の外
残念ぶり喜ぶ歌さ〳〵世大き雄大の色の〳〵で三用り
立勇るものと〳〵思〳〵ひ立ての〳〵ハ猪乃ちゝかきき
間中乃背山へ〳〵四七八辺ば〳〵ハとり走り支と渡世とする
事と〳〵ぞ猪一辺とれバ皮ぶ二百文半膽ぶ三百文半まぶ
何ぶ二百文半〳〵ゆりて敷合七百文程ゆきする事とぞ成
七百文と九〳〵猛獣〳〵勇と事ひ日〳〵命ぶけの勝負
乃〳〵とゆ〳〵僅乃生活と送る〳〵云もけ〳〵ものき危き
事と小国乃〳〵熊と捕ゆる雪中よ熊乃穴へ薪とのぶ
〳〵熊と思ひを思り長さ三尺半の口深と入間乃
猪と実〳〵仕留る事と若実換じぬ事ハ熊の雪中て
深乃猪先と掘るよ大きする深乃翌三ッ四ッよ〳〵と
薬〳〵九ゆ事ハ猟者も忍〳〵よ攫〳〵教さる〳〵との事ゆよ
南部ぶ東遊記よ記〳〵又他別ゆ〳〵熊と知りて猪と
亜鉛〳〵うして熊乃ほ乃肝乃下の方〳〵と鉄砲りて
打事〳〵一打ゆ〳〵ゆぬ時ハ早ごと四〳〵打〳〵ぬ事と打
損ぜ事ハ驚大よ怒り〳〵鉄砲ゆ〳〵移〳〵ハと云りて猪ハ

勿論人々も戦裂事折よりまして〳〵ハ弓矢事うまども先手
換もどる事ハ一向よりなきさの事周遊者法よりへ全外
誠中富山清り門の大蛸ハ斗馬と取養ひ漢舟と魔へ
〳〵ゆへ人々とまとり漢人乞を捕ふり御ふり故よ船中よ
宣森〳〵侍くバ鞘覆ひ者〳〵ゆと先船乃ようち
無るとと目早〳〵死とふ〳〵そをと切落〳〵速り漕ゆる
そ者ゆ事生死一瞬乃間よ関る城よ壮ゆ乃戦場よ
都さ命と蠱埃ふり軽んもるハ忠又義よりて人倫と
唱ふ〳〵故ハ天下乃暴悪と濤んゆるふりさまども蛸の
足一本よ〳〵べくゆを紀伝義光ふ義死〳〵人ども物のそを
物乃数のそ物〳〵もどう〳〵との事ハ山海名産者會よ見え
ふり皆図日乃使ふ〳〵〳〵ゆもを者さ波世〳〵武門乃

家り生まて〳〵も〳〵太平乃浮世よ出云弓ハ袋太刀を
鞘り納め抱と言ふ〳〵義車風流と事として生涯と
強ふる云ハ恐なの〳〵皆
東照宮乃　神徳作も悪成事〳〵心得遠へ〳〵
関よ云三山六海一平地と〳〵世界ハ山三十ゆふ〳〵
平地ハ僅成事〳〵の〳〵山国〳〵生まて山猟と事とする
人々ゆのゆ〳〵者さ事ハ婦女〳〵ゆ〳〵ゆ平原都會の
地り住ふ人ハ野の〳〵も結乃働ふを志〳〵ゆ〳〵ハ
仙ふを成ゆ〳〵書付亜ぬを時道云ゆ者乃他
人も安亜且地名兵主乃名又月日も委敬ゆ亜た
一度忘ま〳〵後ハ如何ゆ思ひ出ゆ今ハ道云も黄泉の
客の彼り〳〵ぬまバ尋相もう〳〵ゆ猪と組留ふ〳〵か

世ふハ多〳〵ゝ〳〵外集ゝと書載亟ゝり
右縁道云十六歳の時兵ゝ人伯州言堂ゝり豊州秋
葉山へ行逆ひまの村角へ（亟ゝり勢ゝる〳〵山猪ハ山芋の
性来へ射出ゝ亟ゝりハ亟ゝ行ゝ敵山而ゝり寄ゝり
ゝ〳〵と云〳〵達〳〵聞ゝまゝ左ゝり竹ゝ手ゝ〳〵ひ
敵逆切とり即座ゝ竹槍と拵〳〵持行ゝり〳〵て果て
猪敵丈出ゝるを励義働とな〳〵三丈と実敵せ〳〵
事ゝのりと知ゝ居〳〵ゝの道云の死後ゝ予ゝ世ゝり
ゝ〳〵多事知ゝまゝ又常陸の国の何ゝみゝく細き
野道ゝ〳〵馬ゝ乗ゝ来ゝる浪人の理ゝ云ゝ亟ゝ外せ〳〵伯
道云服ゝ〳〵馬〳〵兵ゝ一時ゝり〳〵源田へ投ゝ亟ゝる
基義事ゝ〳〵世ゝ予ゝ亟ゝ〳〵ゝ国亟ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ

汀亟ゝる国ゝ忍ちゝゝ〳〵ゝりゝ〳〵ハゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
長〳〵も地ハ時ゝ乗ゝ〳〵ま〳〵後澤ゝ〳〵ゝ亟ゝ亟ゝ義事〳〵

鰐鱷の恐き矢魚と捕ゝる事

尾張の国名古屋の西中ゝ〳〵云所の町筋ゝ〳〵ゝ云有
川中堆に同ゝ〳〵〳〵ゝ〳〵ゝ天保八年丁酉七月亟前の事なるゝ世
川亟ゝり船屋町〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ小橋のゝ〳〵ゝ〳〵ゝ小童
大勢寄合水中へ遊び居ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
来ゝて面ゝ〳〵故振逆ゝり見ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
兵の背〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ

頸部より大きく見則ち魚の脊の背の故に又主次の橋
縮行くに成るとき行くに篤く見るよりも大成頸の先一寸の
成に丸く細き歯と生毛又多く業なる怪物故
唯も捕押へんとする者もあるに非ず脱よ之逃を
免るる所よ去人の男よ勇猛高義性年を経て之を捕り
屠会せし事を世に等安縮行くに大隅馬町と云町の
橋の下より忽ち水中へ飛入大成たる網とんかよ仕て
頸と押へたるとも何の大魚のこなるまで件の口に歯の
さきまでさ如何成毒魚ぞ毒魚ぞ多く業の故に人てハ
把へ揚るとも又ぞ大勝必入雖ども捕揚に大盥よ水を
たくえむりに入れるよ長さ二尺縮まる尾の方曲りて
漸くに入り抜き怪魚の尻の方ハ全く鰻鱺の如く
眼に長大なる歯も大張の如き歯なる鰐鱺ハ尋常魚
魚の如く尾さまざま鰻の如く鱗よ鱗なる肌無名合を
脈蠱の板なる茶褐色なる病のごとくむし肌もなり
腹を嵐の蠱なるに生を後大きく後の下よ蝌蚪の
蛙よ変じ無る時よ生無りるごとくの如き縮き色
左右よ白ぎ八ツ付なり生形ち先鰤魚のごとくなる
口に鰤魚成ごとくハ人えども中にたれも知ざえなり
如何成魚と云事多り業なり元来江川の三ハ勝川
と云大川なり多水底川と云大川と体新に用水よ
なるハ水なる勝川も水源ハ山川なるとも支八十里も
川上なる支分ハ利川なる常ハ多の如くなる龍蛇の住
縮の渕瀬もなる支分ハ江川筋へ多水の後ハ底も見

四ふ四〻の濱にはゝ程の魚の住屋さにはゝもなくまど〻も如何〻〻何まとり迷ひ出来りるるやうに不審成事〻〻却て魚形ちに成りて居りたるに毒多くと似ど動て漂頃優長なるものゝ〻躍り競又を鼓付たるのよ姿ど鮒鯽鯽の類と異へ成るよ所ゞ〻人のもなるまて小魚と食〻事用程も活け生るゞ事用よ山作ども乞爻〻見せるのもと出せ〻よ同もなり艶うるう子ゞ若靈水野金治と云者ハ此中下の者ゝ〻事時水もとよ水中よ入魚を助け〻魚と乞〻る者故異よ吹〻書記〻常〻魚の尾長の国を余国よ移さく山なり〻溪なり〻平等ゝ平地なり〻用水悪水なりり用水〻云ハ田へ入る水悪水〻云ハ田入吐捨る水〻如獨う程なる魚魚の住ゞ所ハ〻

鰒

鰒よわ手ゝ見ハ川
ゝ指先の所
嵐のゆゝ見ゝうと

背

猫俣老婆の化居るの事

上野の国某の村り屋根葺と渡世とする男を代者
出る所津義の〳〵ちゝ人の老母をそるよ事ふるの切
うる事實へり孫娘養うるものゝうりさまとる家民の事
なるまバの母と家よ孫一置自分ハ日〳〵職と励ことと
家〳〵稼ぎ歩行うり叔彼老母の門とう〳〵酒好飲る
ゆゑ毎日酒りうを酒と武合徒づ古壁とうの母代能
門〳〵むと楽こゝして暮〳〵るゝ母年老うる故ま
孫よんさ双面変荒らうに成ぬまども彼者心とりの門く
楽む男うまバつよ〳〵と孫と長〳〵るゝ〳〵陸るよ彼男
もまや年もなるゝ面と成母も次第に老年よりしを
面ちるよ亜外へ引り出〳〵嫁ぐ事も不安堵よ思うるべ

且ハ老母唯さへ人間ものとさせ給ハ不自由のものなれば
孝道と云ふ事一すじ迷人〻妻とむつまじかる事とも
ながらも彼老母既と云事と申〻きゝひるまず孝行
なれば男故先〻母の存命よまつせ給ふ事なれば
妻と迷ふる事を人〻勧め母さへ人ゝとさせること
切〻孝道と云ふ理なり夫〻の人の中よハ如何様
むつまじさ母人なりとも親よハべきなれども
ときもめよさしたまふ〻急も爾の人よまつせ給ふ
細〻ひさまのごとの如ふるまふ〻漁〻人
気ねるるよまつせ妻とむつまじ乳るよりこの如く紙既
〻老母よ事ふる事ふるものなるよ彼老婆
詩の外此既とさ〻ひ〻孫ふる爰なり日〻と云神よ

ぞむるまゝ何とも苦と思ふとも〻〻〻びるる女なるに
何の恨よ母ごさ〻ひの〻と云ふ〻ハ恨ぞとて
中ふるまでも妻よ恨と申〻後ハ又〻前のごと〻
老母さへ苦させるる〻〻和武時何事ふるる〻男の
屋根葺仲間ハ家へ集り〻酒ふる〻張〻ざ〻め
給ふる〻亟後ふり仕事も休〻酒とたゝ者
相のものも一二種拵へ人〻の来ると結ふるよ〻ふる
何事面〻人俄の用事出来〻一面人も来〻ぞ面
拵酒も者も澤山り何まりふるまゝ常〻妻変
ゆ名母よ存ふる酒も拵ゝめざり〻きよ我天ふり
母よ無へよ〻〻ふ相よ澤山よ相の砂〻て幸ひ
ふまゝ〻酒よ者よ迷ふの老母と食ふ〻ふまゝ

老母も初めは大驚びなれども酒も数盃傾け肴も悉く食尽くして心持よく部屋へ入件の男もそこそこに行付く程なく眠りしに主人は何ら老母の物語る音の頻りに聞えるまゝ怪しみ窺へと命じて見せもせず何さま老人の口まねやんより任せ何とかもそこめ出さまして面白くするのうるべしと思へども痛めも取り乱さずして彼母近年にはなきこゝ出さるゝ物語り故はさぞ嬉しかるべしと何事も行届くまでと平速大とおかつると焼鳥に森間と見るうちこハいかに母の者物を云ひ酒の酔ひて居たるひもうきうりよ物語せしその新の音のうるさうるの彼男も涙に酔と流しうるさと

能く性の静なりしかるものとや信じ事と思へよりもとる猫俣の姿を見く見切ると止づきよ抱ぎ心と変へ先絶えん彼猫のあるもあるとと強く強りよるる天運の至る所なりや能く酔ふふと見へる猫ハ少しも見へるまゝ祈りうるさ近隣兵村中心安き友甚云ひ年寄なぐと心配大勝指然よの顔とおるゝ肉へ入へ見るよ猫ハまぐ森入居るまゝ何の雑色もうゝ主人は生捕こうぬ行方なるこそ云事と萬考見るよ三年俗り心深酒も好とうり意ろもかゝ嬉るものも好ると嫌ひ色るゝ一緒の取り落るとやぐり怪きもの落ると云もう一同のゝ成仏障るゝ仕切せ引り抜よ成ゝ故

年の親を食ひ殺し猫俣が食ひ殺しの家の内をこそ
踏る隠さう舞よ水あるよ桶の下圓煙裏のそこに実の
光母の骨ハそこまでよせ隠さう故よし猫ゝそ母を
捕食ひ殺しそこ母ゝ化粧り居るにお遠ろきて人も
驚きて近村へも伝へ代表
役所へと彼猫と連れ行き評議もそこ後し猫を
彼男へ引きまゝ心まうせよすゆべしこの上知故
四象親の歌のとバ生垂きにしのぶ出女桜の
ものゝこゝろぐよきり殺き彼村の入口道のそこ前
り塵ゝ猫俣塚と云ひ成石碑を建ゝこの事
を時り彼近村へ引居り土の性よく咲ゝあり
し土ハ同職和故彼菊師も知者ゝ弟よ四合の事故

文拙

雪よ吐乃吹ゆるうまうせ鮫形〳〵見事〳〵世を猫の
形を世の者吐乃あり代猫侯のりしやうど見よ尋ゆ
るに武蔵猫侯〳〵大きさ江戸よ居る格別大ひ
なる太猫を江戸の太八よりの大なり八一振大ひ
なる太猫を江戸の太八よりの大なり八一振大ひ
なる太猫を江戸の太八よりの大なり八一振

寿つまと手を引と墨よりくろく能く時義の者のや
仲の方の見へよりかくる時を早須ゝ大根根は二寸に
紫ゝぎ色疫拾ふ人ゝ〻〻番とう居るよ猫を二匹繋ゝ
繋ゝもうゝうて睡りとゝゝ居見物の人ゝ三位ひ
彼色ゝに質変色を細ゝゝ目と寄ゝゝ手眼中の
突ぎきハ大や馬とゝを大遠ひ猫ろ変眼精ゝゝ乞ゝ
寄ゝゝ眼を如何ゝ方ゝ目ゝ根ゝ猫ゝ〻〻〻
ゝゝて思ゝ出ゝる出去ゝ〻〻繋ゝもせぎ睡りゝゝ
居る根ゝゝも同ゝの猫を見ゝゝ逃出ゝゝせゝ寄ゝ
見ゝゝゝゝで今ゝゝも彼地ゝ〻ゝ行後ゝゝる〻
猫後塚ハ目前ゝゝゝ村の名仲の男の名猫ゝ
ゝも変変ゝゝ能ゝゝゝゝ二十ゝを猫ゝと

猫ゝ〻変化せゝゝゝぎ忘ゝゝ猫ゝ〻ゝ〻事ハ方の
年の事ゝゝ長寿法ゝゝも大ゝも異様の者加年ゝ
ゝ〻見ゝもゝ〻ゝ〻ゝの歳ゝの年の事を見ゝゝゝゝ
ゝ時年を繰度ゝ見ゝゝ寛政ハ度年須の事を
ゝゝゝゝ

武州荏原郡山澤村薬師寺（淡島大明神）（下谷）可雲和尚ゝゝと
同ゝ〻同須ゝゝゝ彼男ハ猫を猫ハ〻ゝ特何ゝ者ゝ
乃猫義ハ化ゝゝゝ猫ゝゝゝハ元文の事ゝゝハ
不見ゝゝゝ水ゝ新ゝゝ者も世ゝ新変事
ゝゝハ宝ゝゝ何ゝ賞ゝ品もゝゝゝゝ押量ゝハ
一条ハ猫ゝゝ化ゝゝ寿事の事の事ゝ水ゝ他日
者ゝ傳と撰ハ必加入ゝ事実ゝゝ尋ゝゝ

ごとく此地を支配するも今嘉永二年より八三十餘年の昔の事なり年若く時分故かく老木の事よ
り昔ゆえ支流〜〜敬念の極なりとのことなり尊
〜〜しき次第〜〜

篤木格〜化せる神社の事

京師下加茂の摂社なり出雲比良木大明神〜称せる社を祀る所の事を願ひ〜願を成就の後八先ハ格の木と
よるべき外の木と生るものもなく〜ぞ絶るよその木
皆格〜変化せる〜支及び居なり天保九年戊戌彼地よ
り〜時過〜此社を系統す能〜見待るよ神垣
の四方その間もなりつん種〜の木ども皆格の業と
生〜大神宮木格〜成る多〜之木椿玉樫木穀山梔子

格神社

樫柳南天木犀白椿正木ホコ等格〜変化す〜みるか
却て多ぐ格〜るまの〜〜僅より変じ無りるるもを
又種〜〜〜て多ぐ〜も変じ無りるる南天正木柳も
なり〜〜右神垣の内を種る場もなく自然もなく
入雑る故垣の外ようを面〜〜に種れ着もなるよ悪〜
変ぜ〜之を内右神垣の内よ接骨木の木三四株もなり
何まても接骨木の業と生じ〜格よなるべき柳よ見
徒〜まども押合〜種込まる中ようバ下枝ホハ格と成
無り居〜まも疑〜ハ分り業〜り玉椿木犀柳ハ木振
業振〜を格り似寄るこの故変化無りより見分け
ぐ〜き種りよる格〜成居ほまども山梔子柳を幹り
小枝よ多るを〜〜〜〜木振も弱り居を支りに

薄き葉も厚めよりも葉も角と生じ居て
後に柊の葉は変化無り居までも幹ごの振合はきまり
めに本枝もあざを後なるも多く中ほどは南天は
別に澤山の細めるに赤ざかりと変じ無ざる木も
多くは元来南天は本振葉振も大ひは違ひ居るまでも
支成り葉は角と生じに柊の葉になり居るは
書解き難きまに形はりの通ども居るのて形
逆世一種南天のて葉形は今に柊のまさの如ぞり俗は柊南天と云まて
阿蒙陀南天なる云ふ文に作り社り葉ぬ人絶ひとまち幸の
隣家の給本某平ぐ上京せしより僅二年ばかり早く彼
地へ来給に見るよは松樹に花を咲居た
まで葉は色赤角生柊に成居るは別に不思議
成に能に見来り驚に吐に成と疑に安間

南天は本振葉振も早速に変に葉
皆のめに南天の後めに葉に
角と生じに柊に
なり居るなり

何で沢山幸に角に成と
葉に細る幸にて後成すかにあす
中の細に成の変ぜざる南天も多くまで
中に細に年後るのやはのごとまま
まに能柊の葉と変に居るも数樹あり

亟し故事本末をたづねしに尋ぬる索もとぶも拓植の
義にして八一樹もの気早意〜変化して左の格とぶ〜
事を見えうり長くも神佛の利益八時変をよ量り難き
ものと 伊豆の國小瀬明神の社本と同様 此式神の事八都名百号清水
よりも見えんぞ何の神よおわしませしやと尋ても唯此
良本大明神とや事のこと知居〜近来京地ハ十社余拓
ゝ事流行す出〜〜此神も毛間うて多須人多〜流人の
ある社なども神辞八多り兼うの粉社況の数と知り
吟探るよ祭神八素盞嗚尊〜〜地熱武間の神ゝ
別出雲牛於神社〜〜大嵩舎新嵩祭の四神事三度
の祭よ関りおわしませ四神よ〜地主の神よりて此社
より西今の家よ移り〜出雲大路又ハ出雲の御門

地名も此社より出一四号の由
文徳天皇仁寿二年の義四月疫癘流行人民疫死多〜此時
勅使此社より来臨の物神人よ神うつり出ハ〜〜疫癘の疫
神拔ひ除〜〜〜〜流宣ハ〜〜〜〜比良本大明神と仰ぎ
なるべきの比良本ハ比〜良本比禮弓ホの縁宿よおわ
〜〜〜右社の四況ハ見えず除疫よ人家の戸口よ
柊の枝と元疫神と唱〜〜比良本大明神の流宣と
仰ぎ〜〜世人の世よ知りても小児の癘癘の憂と除んと
人〜此神よ祈願もれば必ず験あり〜〜癘癘恠〜と恐も
角も眼の前り美本柊〜〜変化せると拔〜〜なる〜ハ神恵の
宣〜〜〜〜ざる事ハ〜〜〜〜思〜〜〜〜

跋

三妙想出尋古篤奉三教乎方外出爻也
叺舊書聞交遊極廣奇談異事聞而識出
月益歲多恐其久而遺忘也乃錄爲數十
冊名曰著聞奇集談雖俚俗事係報應意
欲留出叺爲学繇勸懲出資也乎叺爲談
也事也已謂出奇異而不常者故久往不
疑則謗罷信焉者鮮矣今尋古必取其的
證詳其顛末其地其時鑿者徵不墮浮雲
蘇根出言足叺取覽者出信斯可叺爲衆
舊奉行諸惡莫作出助矣方今
昭代出化苟有裨益教者槩皆鏤板公
諸世況此集載宜爲天下後世勸懲出資
也奚止爲一家学繇戒出尋古謙

弘樂軒文庫
三觀文庫

讓不肯曰是奚足以傳也矣會其門人濃州苗木藩士青丘学来訪予而谷精舎因試言之青丘学喜而從唯固請屋山稍贅命互嘘呼刻與不刻何預吾事而諄諄乃一片利物婆心出所不覺已也亦吾輩出任也不知者以為妙事其復何傷若夫辭藻出末則屋山出所不屑也矣予亦奚暇論焉

嘉永三歲次庚戌盛春念八日江都鎮護丘主蓮堂真

苗木藩　青丘直意漢隷

不可思議なる事なれども人の心にて成ること
なれば何事をいふも無益なれども本道の師
想山大人は幼年より諸人の尊ぶ事なれば
なほ稚き心にて正義なれば稚ひとなれば
妙面形ふるうの心にて成ることなれども
なほ義一まことに事志深く一置
給ひ面形反古とても若干宅に及ぶ
きるを人の勧めふるの勢ひまさる孫

跋

神慮の為に年ごろ冊子に作る
事よしてこれを一給ふ大人達よ無をも
さひとくに成冊子となるのひを人乳
人毎小同一人を嫌ふ事無面志
称き人の人をも尊ぶ稚さを
見り志をもつ一すべしすべ
なるこの事こひたまひ此おの孔思ふ
やう拙筆にて神慮のみの事よあるを

之世一要の書なり予上り多年代々
に流布しきゝ侍るを於ゝ海と
思へる有ころを抄録し一の人〻に
まほく後の学者と伝えんとゝ
なるを二つに分ちて名付くるは
ねしたし

青山直意

跋

青山直意藏

津坂光齋書
早川可静刻

嘉永三年庚戌十一月刻成